

エコ地域デザイン研究センター

【2024 年度大学評価総評】

法政大学エコ地域デザイン研究センターは、エコロジーと歴史を結びつけるアプローチを通して、「環境の時代」を切り開く「都市と地域の再生」のための方法を研究するという目的を掲げている。その目的に応じ、水辺環境の研究やその成果の市民還元に関しては、「外濠市民塾」や「雨水基準制度シンポジウム」などの継続的实施というかたちで具体的で活発な活動が確認できる。2023 年度に「テリトリー」の概念について、具体的に分かりやすい説明を提示する」という年度目標が掲げられているが、まだはっきりした成果が上がっていないように思われる。日伊双方の枠組みを通じた明示化や、テリトリー概念を表す図・チャートの作成、あるいは関連した刊行物などを期待したい。外部資金の獲得に関しても継続的努力が求められる。社会貢献に関しては、COVID-19 で途絶えていた研究対象地域における対面交流を復活させた点が評価できる。今後、地域の客員研究員との連携を密にしながら、さらにこの種の交流を活性化することが期待される。

大学基準協会の第 4 期大学基準に基づいた評価項目の充足状況の確認	
2024 年度自己点検・評価シートに記載された I 現状分析を確認	すべての評価項目で「はい」が選択されており、充足していることが確認できた。

【2024 年度自己点検・評価結果】

I 現状分析

基準 1 理念・目的

1.1 大学の理念・目的を適切に設定すること。また、それを踏まえ、学部及び研究科の目的を適切に設定し、公表していること。

1.1①研究所（センター）の理念・目的を明らかにしていますか。	はい
1.1②研究所（センター）の理念・目的を規則等に明示し、かつ教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。	はい
【根拠資料】	
法政大学エコ地域デザインセンター ホームページ https://eco-history.ws.hosei.ac.jp/wp/concept/	

基準 2 内部質保証

2.1 内部質保証のための方針を適切に設定していること。また、教育の充実と学習成果の向上を図るために、内部質保証システムを整備し、適切に機能させていること。

2.1①研究所（センター）において、研究所長（センター長）及び運営委員会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。	はい
2.1②研究所（センター）において、自己点検評価結果を活用して改善・向上に取り組んでいますか。	はい
【根拠資料】	
法政大学サステナビリティ実践知研究機構規程 法政大学サステナビリティ実践知研究機構細則 エコ地域デザイン研究センター運営委員会議事録	

基準 3 教育研究組織

部局による自己点検・評価は実施しない

基準 4 教育・学習

部局による自己点検・評価は実施しない

基準 5 学生の受け入れ

部局による自己点検・評価は実施しない

基準 6 教員・教員組織

部局による自己点検・評価は実施しない

基準 7 学生支援

部局による自己点検・評価は実施しない

基準 8 教育研究等環境

8.1 研究活動に関わる支援、条件整備を通じ、研究活動の促進を図っていること。また、健全な研究活動のために必要な措置を講じていること。

8.1①「法政大学研究倫理規程」に沿って、学生も含めて研究倫理の遵守を図る取り組みを行っていますか。	はい
【根拠資料】	
<ul style="list-style-type: none"> ・2023 年度コンプライアンス研修受講者名簿 ・2024 年度コンプライアンス研修受講予定者名簿 	

基準 9 社会連携・社会貢献

9.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施していること。また、教育研究成果を適切に社会に還元していること。

9.1①「研究及び社会貢献に関する方針」のもと、学外機関、地域社会等との連携、大学が生み出す知識、技術等を社会に還元する取り組みを行っていますか。	はい
【根拠資料】	
<ul style="list-style-type: none"> ・外濠市民塾（継続して活動している） ・雨水基準制度シンポジウム（継続して実施している） ・玉川上水・分水網上下流連携総括シンポジウム（継続して実施、活動している） ・グリーン・インフラに関する研究 ・エコ地域デザイン研究センター年度報告書の刊行 エコ地域デザイン研究センターウェブサイト参照 https://eco-history.ws.hosei.ac.jp/wp/	

基準 10 大学運営

部局による自己点検・評価は実施しない

上記の現状分析結果において、【いいえ】と回答した項目があった場合は、その理由と改善計画について記入してください。

大学基準	【いいえ】と回答した点検・評価項目を記述してください
基準を選択してください	
【いいえ】と回答した理由と、改善の必要がある場合、改善計画について記述してください。	

II 改善・向上の取り組み

1 2023 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2023 年度大学評価結果総評】（参考）
エコ地域デザイン研究センターは、学内外の研究者や専門家と連携した文理融合の研究活動や、学外組織と連携したプロジェクトによる研究成果や知見の共有などを特徴としているということで、2022 年度にも複数のプロジェクトに取り組み、多岐にわたる対外的に発表した研究成果を挙げ、外部資金の獲得やそれに向けた努力がなされていることなどは評価され、引き続きプロジェクトや研究成果及び科研

費を含めて外部資金の獲得に向けての取り組みが継続されることが期待される。

その上で、2022年度の年度目標のうち、最も重視する目標として「テリトリー概念の明確化、分かりやすい伝達。そのためのプロジェクト展開地域における地域の人々の意見集約。」が挙げられ、その目標を達成するための施策等として、「一目で概念が捉えられるチャートまたは図のようなものの制作と提示。」とあったが、昨年度中は概念図の完成までには至っていないようである。ただ、昨年度末に記入された年度目標達成状況総括からは、概念図の作成にも寄与するような取り組みが進んでいるようであり、今後の進展と概念図の完成が待たれる状況にあるものと拝察される。

【2023年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

テリトリー概念の分かりやすい伝達に関しては、副題として展開している「アーバンとルーラルの対と融（対立と融合）」は多くの人に分かりやすいとの評を得ており、今後ともテリトリーを単独では使用せず、常に副題を付していくことで相当程度課題に答えられるものと考えている。また「一目で概念が捉えられるチャートまたは図のようなものの制作と提示。」については、昨年度本場のテリトリー研究を目的にイタリアでの海外研究を終えた研究員がおり、その概念を整理しつつこれを日本に当てはめ、先記副題を図等で表すことに取り組んでいく予定としている。

外部資金の獲得については、明確な成果は挙がっていない。引き続き取り組んでいきたい。

2 各基準の改善・向上

基準6 教員・教員組織

6.3 教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。

6.3①研究所（センター）内で教員の研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るために、組織的な取り組みを行い、成果を得ていますか。	S. さらに改善した又は新たに取組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A（概ね従来通りである又は特に問題ない）
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		

基準9 社会連携・社会貢献

9.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施していること。また、教育研究成果を適切に社会に還元していること。

9.1②社会連携・社会貢献に関する取り組みにより、地域や社会の課題解決等に貢献し、大学の存在価値を高めることにつながっていますか。	S. さらに改善した又は新たに取組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A（概ね従来通りである又は特に問題ない）
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		

III 2023年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	研究活動
中期目標	都市とその周辺地域の成り立ちや関係性を、歴史文化・水循環などの観点から総合的に捉える新たな領域概念「テリトリー」を提示するとともに、その内容と意義の明確化を図る。
年度目標	「テリトリー」の概念について、具体的で分かりやすい説明を提示する。
達成指標	各プロジェクトにおけるテリトリー概念を表す表題の整備
年度	執行部による点検・評価
	自己評価 B

未 報 告	理由	「テリトリーオ」の概念については未だ分かりにくいのではとの状況が続くなか、昨年度末より提唱している「アーバンとルーラルの対と融」という副題は好評であり、この二つを組み合わせると分かりやすいテーマとしていけるのではないかと考えている。
	改善策	「テリトリーオ」の概念の解きほぐしも含め、イタリアで海外研究を進めた兼任研究員も帰国しており、日伊双方の枠組みから、再度概念について検討していく。
評価基準		社会連携・社会貢献
中期目標		学術的知見をもとに、具体的な地域の近未来の姿について、地域と共に議論しその実現に向けた社会的な発信を行う。
年度目標		COVID-19 感染対策の変化を捉え、対象地域との人的交流を感染拡大前の水準まで回復する。
達成指標		対象地域における対面での交流活動の実施量
年 度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	B
	理由	主に学外で活動している多くの客員研究員の活動の全数把握には至っていないものの、再起動した多摩川流域、佐原域学、斐伊川島根半島などの活動において全て対面にて地域との交流が再開されており、目標に近づいていると言える。
	改善策	今年度は実施に至らなかったが、年度末報告書に掲載する研究活動の情報を収集する際、地域との交流案件の実施情報を合わせて収集することが考えられる。
<p>【重点目標】 テリトリーオ概念について、プロジェクト展開地域における地域の人々の意見を集約して、多くの人に分かりやすい目標とし打ち出す。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 概念が容易に捉えられる語の確立。</p> <p>【年度目標達成状況総括】 当面は分かりやすいと言われる「アーバンとルーラルの対(立)と融(合)」を掲げて議論を進める中で、これと組み合わせると誰でもが納得できる「テリトリーオ」概念を表す語を引き続き探していきたい。その上でこれを軸に活動の活発化を図っていきたい。</p>		

IV 2024 年度中期目標・年度目標

評価基準	研究活動	
中期目標	都市とその周辺地域の成り立ちや関係性を、歴史文化・水循環などの観点から総合的に捉える新たな領域概念「テリトリーオ」を提示するとともに、その内容と意義の明確化を図る。	
年度目標	昨年度に確立した副題（アーバンとルーラルの対と融）を軸に、概念整理とその表現方法について検討、とりまとめる。	
達成指標	テリトリーオ概念を表す図、チャート等のドラフトの作成、提示。	
評価基準		社会連携・社会貢献
中期目標	学術的知見をもとに、具体的な地域の近未来の姿について、地域と共に議論しその実現に向けた社会的な発信を行う。	
年度目標	客員研究員が学外で盛んに展開している各地域での研究の状況把握を図る仕組みについて検討し、実行する。	
達成指標	各地域で展開している研究の状況把握と情報共有のための仕組みを作る。	
<p>【重点目標】 テリトリーオ概念について、プロジェクト展開地域における地域の人々の意見を集約して、多くの人に分かりやすい目標とし打ち出す。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 テリトリーオ概念を表す図、チャート等のドラフトの作成、提示。</p>		